

Secular trends in the incidence, risk factors, and prognosis of transient ischemic attack in Japan: The Hisayama Study

古田, 芳彦

<https://hdl.handle.net/2324/2198516>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

(別紙様式2)

氏名	古田 芳彦			
論文名	Secular trends in the incidence, risk factors, and prognosis of transient ischemic attack in Japan: The Hisayama Study			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	飯原 弘二
	副査	九州大学	教授	鴨打 正浩
	副査	九州大学	教授	萩原 明人

論文審査の結果の要旨

背景と目的：日本人地域一般住民における一過性脳虚血発作（TIA）の発症率、危険因子、予後の時代的推移を検討した。

方法：1961年（n = 1,621）および1988年（n = 2,646）に設定した脳卒中の既往のない40歳以上の住民からなる2つのコホートをそれぞれ24年間追跡した。危険因子とTIA発症との関連はCox比例ハザードモデルを用いて推定した。また、両コホートから抽出したTIA発症者からなるサブコホートと、年齢と性をマッチさせたコントロール群からなるサブコホートを用いて、TIAがその後10年間の全脳卒中の発症リスクにおよぼす影響を検討した。

結果：24年間の追跡期間中に、1961年コホートでは28人、1988年コホートでは34人がTIAを発症した。TIAの年齢標準化発症率は、1961年コホート(1.01対1,000人年)に比べ、1988年コホート(0.66対1,000人年)において有意に低かった（p = 0.02）。TIAの危険因子の検討では、いずれのコホートにおいても収縮期血圧の上昇がTIAの発症リスクの上昇と有意に関連した。一方、糖代謝異常および血清コレステロール値の上昇は、1988年コホートにおいてのみTIA発症の有意な危険因子であった。1961年と1988年のサブコホートのいずれにおいても、TIA発症者はTIAのないコントロール群と比較して10年間の全脳卒中および脳梗塞の発症リスクが約7~8倍高かった。1961年と1988年のサブコホートの間にこの相対危険の大きさに有意な差はなかった。

結論：日本人一般住民において、過去半世紀の間にTIAの発症率は減少した。これは、わが国において降圧治療が普及したためと考えられる。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。